

難しい問題

とある金曜日の夕方から、J M I A（日本登山インストラクターズ協会）事務局ミーティングを開催していた。この日の午前中、榛名山麓に在住する佐田一郎講師からメールが入った。佐田講師はこの週末の日曜日、西上州・烏帽子岳での登山教室が予定されていた。

「日曜日は悪天が予想されるので、教室は中止にしませんか」、という内容のメールだった。

ぼくは佐田講師に電話を入れた。「明後日だよ、悪天の確立が高いなら中止にした方がいいと思うけど、明日まで待ってみるとか、当日早朝が悪天だったら中止連絡をするとか、選択肢は三つあると思うんだけど」「悪天の確立は高いし、雪ならまだしも雨にやられそうですよ」「この時点で中止にするか・・・」「その方が無難です」。で、ぼくは参加を予定されていたKさんとYさんに電話して、中止を伝えた。事務局ミーティングのさなか、その話しを披露したら、大津講師から、「明日天気悪そうなので、ぼくの教室も中止にしました」という言葉が返ってきた。翌日、7時頃目を覚ました。暗い空を予想していたのに、陽射しがある。午後になって雲は広がったが、雨は降らずに夕方を迎えた。

悪天の予報にどう対応するかは、いささか難しい問題である。ぼくがまだ若かった頃は問題なかった。「雨天決行」と決めていたからだ。予報優先で明日の山行中止を決めてしまったら、予報がはずれて晴天の朝を迎えると悔しい思いをする。予報がどうであれ、現地まで行っておくにせず、で、雨天決行としていた。講師スタッフも若かったし、参加して下さる皆さんも若かったので、雨天決行に不安を抱くことはなかったのである。

しかし、講師スタッフも若くはなくなり、参加者の高齢化もすすんでいる現在では、雨天決行は問題ありと考えるようになった。弱気の発言が多くなったとご指摘を受ける昨今だが、自身としては弱気ではなく必然の発言であると考えている。それが証拠に年々増加している山岳遭難事故の大多数は、60代70代の高年登山者によるものだ。若い頃はころんでもさっと起き上がって、笑って済ませられたが、この年になってころべば捻挫・骨折を招く例も少なくない。昔取った杵柄を手にはいけないと思うのだが、いかがであろう。

50歳代までは、雨天決行に迷いがなかったが、70歳になったら迷いが出る。雨の中、歩きたくないという気持ちが湧いてくる。予報優先で中止にしてしまうのは残念だし、現地に行って雨に降られたら嫌だしなあ…。企画の中止をどの時点で判断し、参加者に伝えるか、それは非常に難しい問題になっている。毎日が日曜日になった現在、その日にそれほど執着することもなく、予報優先で中止にしたその日が青空でも、まっいいかと思えるようになった。安心登山の一步である。これは弱気ではなく、余裕といたい。